〔西遊雜記十四〕雲仙ケ嶽（俗に温泉がだけといふ○中略）谷々の流にも湯氣立上りて、いかにもあやしき山也、麓に温泉あり、湯本といふ、功もありとて入湯の人もある所也、此温泉ばかりにあらず、谷々に温泉有と、土人の物語り也、

〔肥前風土記（高來郡）〕峯湯泉（ミネノユ）（在二郡南一）

此湯泉之源、出二郡南高來峯西南之峯一、流二於東一、流之勢甚多、熱異二餘湯一、但和二冷水一、乃得二沐浴一、其味酸、有二流黄白土及松一、其葉細、有二子一、大如二小豆一、令二得一蹔、

○按ズルニ、此ハ今ノ温泉嶽温泉ノコトナルベシ、

肥後國日奈久温泉

〔西遊雜記九〕田の浦は漁家計、惡敷町也、此地より日奈久（ヒナク）へ三里、此あいだに赤松太郎と稱す佐敷太郎に劣らぬ嶮しき坂有、日奈久は大槩の町にて、熊本侯の御茶屋もあり、温泉も有、入湯の者も折々は來る事にて、功有温泉といふ、

湯ノ浦温泉

〔西遊雜記九〕水股より湯の浦へ三里、此間に綱木太郎と稱せる坂有、上下二里、嶮しき事いふ計なし、肥後の片言にて、坂の名を太郎と云て坂とはいはず、此邊は肥後にても風土の能所にて、民家のもやう薩州より勝れたり、湯の浦少しき在町にて、温泉あり、旅人入湯せるに誰とがむる者もなく、明はなしの温泉なり、湯はあしからず、功ある温泉の由、然れども邊鄙の地故に、他方より入湯に來る人さらになし、よく〳〵聞ば、是より山分に入りて、爰にもかしこにも湯涌地數か所有といふ、

薩摩國霧島温泉

〔薩摩風土記下〕九月十九日、きりしま御祭禮（西社東社）ふもとに湯治場あり、湯の瀧三十二あり、

〔薩摩風土記下〕一湯治場

南東　伊佐　伊なく　いぶすき　ちうの水　水のはな　すな湯

西北　あんらく　いくき　ひわく　きり島